
報 告

看護系大学への編入学に至る進路決定過程に関する研究

關 戸 啓 子¹⁾, 軽 部 太 一²⁾, 郷 木 八重子³⁾,
世 古 まゆみ⁴⁾, 歳 常 沙 樹⁵⁾

¹⁾徳島大学医学部保健学科, ²⁾東京慈恵会医科大学附属第三病院, ³⁾岡山県阿哲郡神郷町立油野小学校

⁴⁾岡山大学医学部附属病院, ⁵⁾岡山県岡山市立宇野小学校

要 旨 学生が看護系大学へ編入するまでの過程と、その過程に影響を与えている要因を明らかにすることを目的に本研究を行った。

そのために、K 看護系大学に編入学している女子学生12人に承諾を得て面接調査を行った。その結果、学生が編入学に至るまでには「動機となった体験・出来事」「編入学の意志決定」「編入学の実現」という過程を経ていることがわかった。

編入学の動機となった体験・出来事は、「学歴に対する社会的評価」「進学に関する挫折体験」「知識・技術の不足感」「看護に対する挫折体験」の4つに分類できた。編入学の意志決定に至った理由には、「大学への憧れ・期待」「自己向上」「勧め」「就職先の拡大」「逃避先として」があることがわかった。「編入学の意志決定」から「編入学の実現」までの過程に影響している要因は、編入学をより可能にさせたプラス因子と編入学を困難にさせたマイナス因子にわかれた。

しかし、編入学している学生は、編入学を妨げるようなマイナス因子を抱えながらも、強い動機付けと意志に支えられて困難を克服し、編入学を実現していた。

キーワード：編入学過程、看護系大学、要因、面接調査

はじめに

看護系大学への編入学制度は、看護系短期大学の卒業生を対象に1976年に開始された。開始後しばらくは、編入学生を受け入れる看護系大学は2校のみであったが、1994年度には4校、1996年度には17校、1999年度には33校と急激な増加傾向にある¹⁾。そして、2003年度は71校²⁾にまで増えたのである。この間、学校教育法の一部が改正され、1999年4月からは看護系の専門学校卒業生も編入学が可能になった³⁾。

これによって、編入学制度のある多くの看護系大学は、出身学校、取得免許、臨床経験などが違うさまざまな背景をもった学生を受け入れることとなった。そのため、

編入学生に対する教育をどうすべきなのか模索するための研究が行われている。専門学校卒業生の編入学受け入れ方法^{4,5)}、編入学教育へのニーズ⁶⁾、編入学教育の方法⁷⁾、編入生の学習経験⁸⁾、編入生の特性⁹⁾に関するもの等である。しかし、さきほどの数値が示すように編入学制度は近年になって急に増えた制度である。編入学生のニーズにあった教育を行うためには、まず編入学生がどのような進路決定過程をたどって入学したのか理解することが大切であると考えた。編入学生の進路決定過程を明らかにすることは、編入学後の教育方法に資するのみでなく、編入学を希望する学生への進路指導にも有用な知見となると思われる。

研究目的

本研究では編入学生に面接することによって、看護系大学へ編入するまでの過程と、その過程に影響を与えた

2003年2月20日受理

別刷請求先：關戸啓子 〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15
徳島大学医学部保健学科

要因を明らかにすることを目的とする。

研究方法

1. 研究対象者

2000年と2001年にK看護系大学に編入学した学生で、研究協力の同意が得られた12人を対象とした。12人は全員女子学生で、3年課程の看護系短期大学卒業後すぐに編入学した学生が3人、3年課程の看護系専門学校卒業後すぐに編入学した学生が4人、社会人としての経験を経た後編入学した学生が5人であった。

2. 調査期間

2001年5月

3. 調査方法

K看護系大学内の静かな個室で、半構成的面接を行った。事前に研究の趣旨を説明し、承諾書にサインしてもらった。面接時間は30分程度とし、1対1でプライバシーの守れる個室で行った。面接は研究者全員が分担して行ない、1人の研究者が2～3人の編入学生の面接を担当した。面接の会話は、承諾を得てテープに録音した。録音したテープは、分析終了後音楽を録音し、面接の会話が消されていることを確認した後に廃棄した。

4. インタビュー内容

- 1) 編入学に至るまでの経緯
- 2) 編入学の動機

5. 分析方法

- 1) 面接時に録音したテープの逐語記録をデータとして、編入学に至った背景や動機となる部分を読み取り、KJ法を用いて分類した。この分類結果から、編入学に至る進路決定過程を抽出した。
- 2) 前述の分析を、まず研究者各自が自分の面接した編入学生（2～3人）と他の研究者が面接した編入学生2～3人について行った。他の研究者が面接した編入学生についての分析担当者は、ランダムに決定し分担した。つまり、編入学生1人のデータについて、2人の研究者が別々に分析を行った。
- 3) 研究者は、分析を担当した編入学生1人1人について、編入学に至った背景や動機を分類し、進路決定過程を見いだした。

- 4) 全員の分析が終了した後に、研究者全員が自分の分析結果を持ち寄り、互いに自分が見いだした進路決定過程について説明を行った。
- 5) 研究者各自が分析した結果から、共通する進路決定過程を見いだすために、研究者全員が納得できるまで討論を繰り返し、必要に応じて各自の分析の見直しや修正を行った。そして、最終的に研究者全員が合意した進路決定過程を本研究の結果とした。
- 6) 合意した進路決定過程にそって、再度各過程に含まれる内容と過程に影響を与えている要因を見直し、分類した。
- 7) 研究者全員による分析検討は、指導者のスーパービジョンを受けながら行った。

結果および考察

1. 進路決定過程

面接内容を分析した結果、学生が編入学に至るまでには「動機となった体験・出来事」「編入学の意志決定」「編入学の実現」という過程を経ていることがわかった。編入学の動機となるような体験や出来事があったとしても、仕方ないとあきらめて現状のままで特に行動に移さない人もいる。しかし、編入学生たちには、その体験や出来事に加えて、編入学を決意する理由が存在しており、編入学へという行動に結びついていたと推測される。なお、この進路決定過程そのものは、編入学生の出身看護学校の違いや社会人の経験の有無、年齢とは関係なく、全員同一であった。

2. 編入学の動機となった体験・出来事

編入学の動機となった体験・出来事に関する面接内容は、表1のとおりである。それを、「学歴に対する社会的評価」「進学に関する挫折体験」「知識・技術の不足感」「看護に対する挫折体験」と解釈して4つに分類した。

編入学した学生の多くは、過去に看護系大学に入学しなかったが失敗したという体験を持っていた。このような学生は、看護学校時代から編入学を視野に入れていたようである。さらに、もっと勉強が必要と感じさせられた知識や技術の不足感、看護に挫折した体験が、編入学へのきっかけとなっている場合があることがわかった。しかし、編入学の動機となった体験・出来事のなかで、最も大きいのは、学歴に関することであった。直接的に

表1 編入学の動機となった体験・出来事

体験・出来事	面 接 調 査 か ら 得 た 情 報
学歴に対する 社会的評価 (6人)	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に社会に出てみて、給料や待遇面で大学卒の看護師とは差があった。 ・大学卒の看護師と何かと比較して見られるので、学歴は関係ないというけれどあった方が良いと感じた。 ・働いてみて、大学卒の看護師はやはり高く評価されているということを実感した。 ・これからは、大学卒の看護師が多くなり、それがあたりまえの時代がくると感じた。 ・他職種の医療従事者からミスを指摘された時に、学歴のことまで言われとてもつらかった。 ・大学卒の看護師は優遇されているように感じるが多かった。
進学に関する 挫折体験 (5人)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護学校を卒業してすぐに大学に行きたかったが、成績が足りなかった。 ・高校卒業時、看護師だけではなく保健師の資格が取れる看護系大学への進学を希望していたが不合格だった。 ・高校の時、大学（看護系以外）に落ちてしまった。 ・高校の時、看護系大学を受けたが全部駄目だった。 ・高校の時、大学受験（看護系以外）に失敗した。
知識・技術の 不足感 (5人)	<ul style="list-style-type: none"> ・大学卒の看護師と比べて、知識が不足していると感じることがあった。 ・短期大学の2年課程を卒業したので、短期大学での講義や実習が短く、自分のなかに知識や技術に関する不足感がある。 ・看護の勉強しかしていないので、視野の狭さを感じる。 ・自分よりも年上の人に指示するような立場になってみて、自分の勉強が足りないことを感じた。 ・3年間に学習した知識と技術が、自分には十分身につけていないような気がして、このまま看護師になる自信がなかった。
看護に関する 挫折体験 (3人)	<ul style="list-style-type: none"> ・重症で複雑な事情を抱える患者を担当した時に、思ったような看護の成果が得られず、看護師をする自信がなくなった。 ・自分の能力を使い果たしたというか、本当に疲れ果てた。 ・スタッフに対して、十分リーダーシップを発揮することができなかった。

しろ、間接的にしろ、大学を卒業した方が看護師として評価が高いという現実を知り、編入学を希望したという学生が多かった。長谷川¹⁰⁾は「看護教育を見ても、できたの看護系大学よりも、伝統と実績のある看護専門学校のほうが学校文化が成熟し教育の社会的信頼度が高いのは明らかである」と述べている。看護師ひとりひとりの質ではなく、卒業した学校の背景だけで評価されるのは確かに間違っている。しかし、編入生の面接調査の結果をみると、実際には学歴だけで評価されてしまう場合があることは否めない。大学卒の看護師と比較された体験が、編入学の動機となっている学生がみられた。

3. 編入学の意志決定をした理由

編入学の意志決定に至った理由に関する面接内容は、表2のとおりである。それは5つに分類でき、「大学への憧れ・期待」「自己向上」「勧め」「就職先の拡大」「逃避先として」と解釈した。

佐藤ら⁶⁾が全国的に行った看護系短期大学在学者の編入学希望の理由をみると、最も多かったのは「看護をもっと学びたい」で66.9%の学生が回答していた。ほかに半数以上の学生が回答した理由は、「大卒・学士の資格が

ほしい」「広い社会的視野をもつため」「保健師の資格がほしい」であった。割合は少ないが、「大学に行ってみよう」(30.5%)、「勧められた」(4.5%)という理由もあり、今回の面接調査の結果ともほぼ一致していた。ただ、佐藤ら⁶⁾の調査の対象は編入学を希望しているだけであって、実際に編入学するかどうかはわからない看護系短期大学在学中の学生である。その点で、実際にさまざまな体験や出来事から編入学を選択した本研究対象の学生の場合とは少し違っているのは当然であろう。佐藤ら⁶⁾の調査では、「大学への憧れ・期待」は少なく、「逃避先として」というような理由はみられなかった。

また、水野ら⁷⁾は千葉大学看護学部における編入生学生の調査において、編入学の理由を臨床経験の有無によって比較しているが差は認められていない。むしろ、非常によく似た傾向を示している。つまり、編入学前の臨床経験の有無は、編入学の理由にほとんど影響を与えてはいなかった。本研究においても、面接した内容から読み取った編入学の理由に、臨床経験の有無による差はないと判断された。

本研究からは、編入学の意志決定には、大学にずっと憧れており、入学したら自分を向上させるために幅広く

表2 編入学の意志決定をした理由

意志決定の理由	面接調査から得た情報
大学への憧れ・期待 (9人)	<ul style="list-style-type: none"> ・大学卒業という学歴がずっと欲しかった。 ・大学だったら看護学校と違ってどんなことを学べるのか興味があった。 ・大学では、専門科目だけではなく、基礎科目や興味のある講義を自由に履修できる。 ・進学したいとずっと思っていた。 ・短期大学の学生の頃から、看護系大学の先生方の教育方法や研究内容を聞いており、自分も学生として接してみたいとずっと思っていた。 ・短期大学の学生の頃から、近くの看護系大学の図書館を利用しており、大学の雰囲気にあこがれていた。 ・大学生をしてみたい。 ・学士を取得したい。 ・大学自体に対する憧れがあった。 ・大学の教員に対する期待。
自己向上 (9人)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分がどれくらいやれるか試したい。 ・後輩に何も教えてあげられなくてはやがゆかった。 ・地域看護の勉強をしたい。 ・指導技術を学びたい。 ・基礎的なことや興味のあることを学びたい。 ・看護の専門以外のことも幅広く学びたい。 ・とにかく勉強したい。 ・人生経験がない分、勉強で補いたい。 ・自分にとってプラスになることがしたい。 ・もっと、看護の知識を身に付けたい。 ・大学で考える力を身に付けたい。 ・総合大学で、まわりからの刺激を受けたい。 ・看護以外の人とも関わり勉強したい。
勧め (6人)	<ul style="list-style-type: none"> ・短期大学で出会った人に勧められた。 ・働いていた病院の先輩に勧められた。 ・看護師をしている親戚に勧められた。 ・祖父母に勧められた。 ・家族に勧められた。 ・看護学校の先生に、これからは大学を卒業しておいた方が良いと勧められた。 ・親が大学に行って欲しかった。 ・知り合いの看護師に、大学に行くように勧められた。若い間に行くように言われた。
就職先の拡大 (6人)	<ul style="list-style-type: none"> ・大学卒しか採用しない企業がある。 ・保健師として地域に就職したい。(注：2人回答) ・保健師の資格を取得したい。 ・保健師になりたい。 ・病院より地域で働きたい。
逃避先として (1人)	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の仕事からの逃避の部分が強いかも知れない。 ・学生をしていれば、周囲の人から自分の人生設計についてうるさく言われないですむ。

(複数回答あり)

いろいろなことを学びたいという理由が作用していることが示唆された。特に、「大学への憧れ・期待」は大きく、大学で学ぶことにさまざまな期待を持っており、大学に対して夢をえがいていることがわかった。

4. 編入学実現に影響を及ぼすプラスの因子

編入学の意志を決定しても、編入学が可能な条件が整

わなければ実際に入学することはできない。そこで、編入学の意志を決定した後、編入学の実現までにどのような要因が存在しているのか分析したところ、編入学をより可能にさせたプラス因子と編入学を困難にさせたマイナス因子の両方が存在することがわかった。

プラスの因子に関する面接内容は表3のとおりである。「周囲の人の賛成・支援」「経済的準備あり」「編入学制

度の情報提供」「編入学制度の施行」という4つのプラスの因子が存在していた。

周囲の人の協力や経済的な助け、情報提供など恵まれた環境に支えられて、編入学が可能になった様子が窺えた。

5. 編入学実現に影響を及ぼすマイナスの因子

学生に、一時は編入学をあきらめようかと思わせた、編入学を困難にさせたマイナスの因子に関する面接内容は表4のとおりである。「学力への不安」「編入学に関する情報不足」「周囲の人の支援不足」「経済的準備の不足」「受験勉強時間の不足」という5つのマイナスの因子が

表3 編入学実現に影響を及ぼすプラスの因子

プラスの因子	面 接 調 査 か ら 得 た 情 報
周囲の人の賛成・支援 (6人)	<ul style="list-style-type: none"> ・病院や病棟の人達、みんなが応援してくれた。 ・親や友達は編入すると決めたら、応援してくれた。 ・編入学について、周囲の人が賛成してくれた。 ・両親の協力があつた。 ・母親が「保健師になりたいのなら、遠くでも受験してみなさい」と応援してくれた。 ・親は「やりたいことは、やっていいよ。」と言ってくれた。 ・看護学校の校長先生が「頑張って受けたら。」と言って、協力してくれた。 ・看護学校の先生が「頑張って」と励ましてくれた。 ・親は大学に行くことに賛成していた。
経済的準備あり (4人)	<ul style="list-style-type: none"> ・将来何かあるだろうと思って貯金していた。 ・親からの経済的援助が得られた。(注：2人回答) ・祖父母からの経済的援助が得られた。
編入学制度の情報提供 (4人)	<ul style="list-style-type: none"> ・同級生からの情報提供があつた。 ・看護学校の先生から編入学制度の情報をもらった。 ・短期大学の先生から、受験のための情報をもらった。テキストも紹介してもらった。 ・編入学する人が多く、お互いに情報交換した。 ・校長先生が資料を集めてくれた。
編入学制度の施行 (2人)	<ul style="list-style-type: none"> ・2年行けば良いというのは、助かる。4年間だったら、行けなかったと思う。 ・専門学校からも編入学できるようになった。

(複数回答あり)

表4 編入学実現に影響を及ぼすマイナスの因子

マイナスの因子	面 接 調 査 か ら 得 た 情 報
学力への不安 (3人)	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床で働いていたので、受験に必要な勉強に関してはすっかり忘れてのことばかりだった。 ・自分の学力では現在の実習についていだけが精一杯で、受験のための勉強はできそうになかったのであきらめようと思った。 ・成績が下がってしまい、編入学をあきらめようと思った。
編入学に関する情報不足 (2人)	<ul style="list-style-type: none"> ・編入学した先輩がいないので、情報がなかった。 ・まわりに編入学した人がいなくて、情報が全く得られなかった。
周囲の人の支援不足 (2人)	<ul style="list-style-type: none"> ・病院の協力は特になかった。 ・短大からの情報提供等、協力は何もなかった。
経済的準備の不足 (1人)	<ul style="list-style-type: none"> ・編入学試験が私立しか残っていない時期だったので、親に経済的に無理だと言われた。
受験勉強時間の不足 (1人)	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事の責任も重くなってきていて、仕事の合間に勉強する時間をとるのはとても難しかった。

存在していた。

佐藤ら⁶⁾の調査でも、編入学希望者の編入学を困難にしているものとして、学力に関するものが最も多くあげられている。高校生が受験する場合と違い、看護学校の在生では臨床実習に追われたり、看護師の国家試験をひかえているなかでの受験勉強となる。就職していれば、さらに条件は過酷で、忙しい看護の職場で合間をぬっての勉強となる。学力の面が最も気になるのは当然のことであろう。さらに、周囲の人の理解が得られなかったり、経済的保障がないと受験は困難になる。本研究の面接において、この困難な中でいかに工夫して勉強したか、自分でどうやって進学資金を集めたかというような、編入学学生自身が困難さを自分で切り開いていった姿を知ることができた。そこには、その行動をとらせた強い動機と意志が存在することが推察された。

6. 進路決定過程からみた看護系大学に対する編入学学生の期待

これまで述べた編入学における進路決定過程を図1にまとめて示した。このように看護系大学に編入学してきた学生は、進学や看護への挫折体験や学歴に対する評価の現実、技術や知識の不足感などの動機となる体験や出来事を経て、編入学を希望して入学して来た。さらに、入学までには編入学を妨げるようなマイナス因子を抱えていた学生もあり、強い動機付けと意志に支えられて困難を克服し、編入学を実現していた。

それだけに、看護系大学に対する夢や期待も大きく、看護学校時代とは違う何かを学びとりたいという意欲が感じられる。編入学を意思決定した理由の「大学への憧れ・期待」「自己向上」をみると、大学へ求めているものは多様である。教員の専門性の高さ、専門科目以外の勉強、看護以外の人との関わり等である。水野ら¹⁾の調査によると、編入学生196人中、109人が「在学中に出来なかった事柄」や「在学中に失望した事柄」があると述べている。大学に編入学するという道を苦労して選択して来た学生が、大学に対して不満や失望感を持つことは残念と言わざるを得ない。

看護系大学に自分の夢を託して、憧れをもって入学してくる編入学生の期待にこたえられる準備が、大学側にも求められているといえよう。

結 論

看護系大学へ編入学した学生の、編入学までの進路決定過程とその過程に影響を与えた要因を明らかにすることを目的に、12人の編入学生を対象に面接調査を行った。その結果、次のことがわかった。

- 1) 編入学に至るまでの進路決定過程は、「動機となった体験・出来事」「編入学の意志決定」「編入学の実現」であった。
- 2) 編入学の動機となった体験・出来事には、「学歴に対する社会的評価」「進学に関する挫折体験」「知

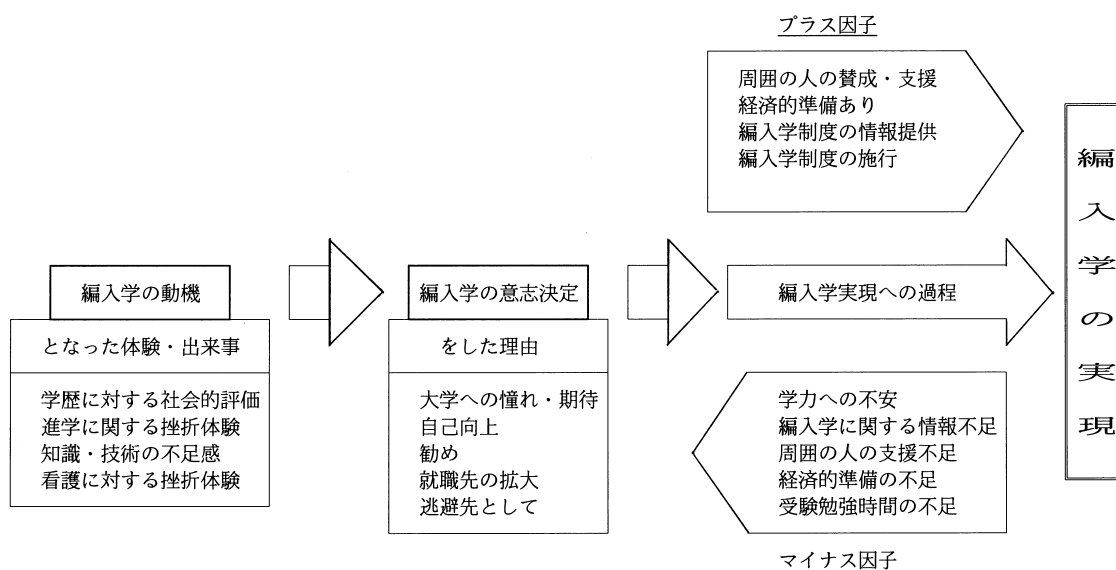


図1 編入学における進路決定過程

識・技術の不足感」「看護に対する挫折体験」があった。

- 3) 編入学の意志決定に至った理由は、「大学への憧れ・期待」「自己向上」「勧め」「就職先の拡大」「逃避先として」であった。
- 4) 「編入学の意志決定」から「編入学の実現」までの過程に影響している要因として、編入学をより可能にさせたプラス因子と、編入学を困難にさせたマイナス因子が存在していた。

謝 辞

面接調査に快くご協力下さいました、K 看護系大学編入学生の皆様に感謝いたします。

文 献

- 1) 水野照美, 小澤桂子, 佐藤まゆみ 他: 看護系大学における編入学教育の評価, 日本看護学教育学会誌, 10(1), 21-30, 2000.
- 2) メディカ出版編集部: 2003年度全国助産師・保健師学校ガイド, メディカ出版, 2002.
- 3) 大室律子: 専門学校卒業生の大学編入が可能にー看護職の学習意欲に応える改正, 看護管理, 8(12), 931-934, 1998.
- 4) 柴田恭亮, 窪田恵子, 小田日出子: 専修学校卒業の大学編入生を受け入れてー西南女学院大学, 看護教育, 40(12), 1050-1052, 1999.
- 5) 中村裕美子: 専修学校卒業の大学編入生を受け入れてー川崎医療福祉大学, 看護教育, 40(12), 1053-1055, 1999.
- 6) 佐藤まゆみ, 水野照美, 小澤桂子 他: 看護系短期大学在学者の生涯学習計画における3年次編入学教育へのニーズ, 日本看護学教育学会誌, 9(1), 13-23, 1999.
- 7) 水野照美, 小澤桂子, 佐藤まゆみ 他: 千葉大学看護学部における3年次編入学教育方法のあり方に関する研究ーその1 編入入学者の背景と卒業後の活動, 千葉大学看護学部紀要, 19, 131-137, 1997.
- 8) 横山京子, 舟島なをみ, 杉森みど里: 実務経験を持つ編入学生の看護学士課程における学習経験, 第18回日本看護科学学会学術集会講演集, 122, 1998.
- 9) 山田あゆみ, 横山京子, 舟島なをみ: 看護婦(士)の学位取得ニーズとケアの自己評価に関する研究ー専門学校卒業者に焦点を当ててー, 日本看護学教育学会第8回学術集会講演集, 8(2), 96, 1998.
- 10) 長谷川亘: 「大学編入」のインパクト, 看護展望, 24(5), 48-52, 1999.

A study on the process of deciding the course until transfer to nursing colleges

*Keiko Sekido¹⁾, Taichi Karube²⁾, Yaeko Gougi³⁾,
Mayumi Seko⁴⁾, and Saki Toshitsune⁵⁾*

¹⁾*School of Health Sciences, The University of Tokushima, Tokushima, Japan*

²⁾*The Third Hospital of Jikei University, Tokyo, Japan*

³⁾*Shingou-town Supported Yuno Elementary School, Okayama, Japan*

⁴⁾*The Okayama University Hospital, Okayama, Japan*

⁵⁾*Okayama-city Supported Uno Elementary School, Okayama, Japan*

Abstract This study was performed to clarify the process until transfer of students to nursing colleges and factors affecting this process.

With consent, 12 female students at K Nursing College were interviewed. Until transfer of the students, there was a process consisting of “experience/incidents as motives”, “decision-making about transfer”, and “realization of transfer”.

The experience/incidents as motives could be classified into 4 categories: “social rating of the academic background”, “failure in an attempt to go higher education”, “feeling of insufficient knowledge/techniques”, and “failure nursing practice”. The reasons for transfer to college included “longing and expectation for college”, “self improvement”, “recommendation”, “an increase in job opportunities”, and “as a place of escape”. The factors affecting the process from “decision-making about transfer” to “realization of transfer” could be classified into positive factors that allowed transfer and negative factors that made transfer difficult.

Though students had negative factors preventing transfer, they overcame difficulties, being supported by strong motivation and will, and realized transfer.

Key words : process until transfer, nursing colleges, factors, interview